

葉月「ウッフ…下半身のマッサージ…お疲れさまでした…私たちが…交代に行った施術は…いかがでしたでしょうか…？」

美冬「これから行う…上半身の施術は…葉月さんと…私とで…同時に行わせていただきます…」

葉月「まずは…左の手のひらを…私、葉月が優しく握りながら…ほぐしていきますね…」

美冬「そして…右の手のひらは…美冬が…ほぐさせていただきますね…」

葉月「はいっ…それでは仰向けになって…そのまま少し体を起こしてくださいね…ふう～
～っ…そのまま…手のひらを…私たちに預けてください…んはぁ～～っ…」

美冬「私たちが…心を込めて…貴方様の手を…握らせていただきますね…ふう～～っ
…こうやって…握りながら…指の先から…溶けるように…もみほぐして…いきますねえ…
はぁ～～っ…」

葉月「ふう～～っ…もっと力を…抜いてくださいまし…貴方様の手のひら…だいぶ…お
疲れになっているみたいですよ…ふう～～っ…普段から…パソコンのキーボードや…ス
マートフォンを…使い過ぎていませんか…ふう～～っ…」

美冬「はぁ～～っ…今日はそういった…指先の疲れも…きれいに落としていきましょうね
…終わったころには…指先も…軽くなっているはずですよ…はぁ～～っ…ふう～～っ…」

葉月「ふう～～っ…小指から…親指まで…ゆっくりと動かして…いきますね…はぁ～～っ
…こりこりって…音がしてますね…ふう～～っ…手の甲にも…お疲れのあとが…残って
ますよ…ふう～～っ…」

美冬「今度は…人差し指ですね…ふう～～っ…はぁ～～っ…そして親指の先…んふう～
～っはぁ～～っ…んふう～っ…それではお疲れの…手の甲も…ほぐしていきますわ…ん
ふう～～っ…力を抜いて…くださいまし…はぁ～～っ…」

葉月「はぁ～～っ…ふう～～っ…手のひら全体も…ニギニギって…してしまいますね…は
ぁ～～っ…貴方様の手…ぎゅ～～って…握っていると…はぁ～～っ…なんだか…気持
ちが…伝わりますよね…ふう～～っ…はぁ～～っ…」

美冬「んふ～～っ…癒されたいという気持ち…はぁ～～っ…貴方様の温かい…手のひ
らから…伝わってきますわ…んはぁっ…ふう～～っ…私たちの気持ちも…ふう～～っ…
伝わっていると…嬉しいのですが…んはぁ～～っ…ふう～～っ…」

葉月「…あったかい私の手…もっと感じてくださいね…ふう～～っ…はぁ～～っ…
この暖かい手で…貴方様の手を…ぎゅっと握ってみます…はぁ～っ…ふう～～っ…」

美冬「んふう～～っ…どちらの手がお好きですか…?はぁ～～っ…教えてほしいですわ
…ふう～っ…」

葉月「はぁ～～っ…あらあら…困っていらっしゃいますね…ふう～っ…これはちょっと
…意地悪な質問ですよ…ふう～～っ…れろお～～っ…」

美冬「ふう～～っ…貴方様の手が…ポカポカしているようです…それに…だいぶほぐれて…柔らかく…なってきた気がします…はぁ～～っ…ふう～～っ…はぁ～～っ…」

葉月「ふう～～っ…こちらの手も…ぐにぐにっしても…痛くないですよ…はぁ～～っ…
…こちらのお手手も…ほぐれたようですね…ふう～～っ…んはぁ～～っ…でも…これかも…ご無理は…しないでくださいね…はぁ～～っ…んはぁ～～っ…」

美冬「そろそろ…次の施術に…ふう～～っ…移らせて…いただきますね…ふう～～っ…
こんどは…腕の方のマッサージになります…はぁ～～っ…もちろん…左腕と右腕…二人同時に…施術いたしますわ…ふう～～っ…」

葉月「では…仰向けになって寝てくださいまし…ふう～～っ…でも少しの間…目を閉じていてくださいね…んはぁ～～っ…ふう～～っ…少しの間…準備をいたしますので…はぁ～～っ…ふう～～っ…ふう～～はぁ～～っ…ふう～～っ…」

美冬「ふう～～っ…まだ…目を閉じたままで…私たちを…見ないでくださいね…まじまじと見られてしまうと…少し恥ずかしいので…はぁ～～っ…ふう～～っ…ふう～～はぁ～～っ…ふう～～っ…」

葉月「ふう～～っ…では…仰向けになられた…貴方様の腕を…ふう～～っ…抱き着くように…んはぁ～～っ…マッサージ…させていただきます…」

美冬「ふう～～っ…こうやって…ぎゅう～～って近づいて…んはぁ～～っ…貴方様の腕をほぐしていきますね…んふう～～っ…はぁ～～っ…」

葉月「はぁ～っ…あっ…目をお明けになってしまって…はだけで…丸見えになってしまった胸…見られてしまいますわ…んはぁ～っ…ダメですよ…そんなにじろじろと見ては…ふう～っ…はずかしいですの…んふう～っ…」

美冬「んふう～っ…胸を見られながらは…やっぱり…はずかしいですけども…んふう～っ…今回はぁ…ふう～っ…手でお揉みするのではなくて…んふう～っ…腕を…私達の乳房で挟んで…直接…胸のやわらかさを…感じていただいて…はぁ～っ…マッサージしていきますの…はぁ～っ…んふう～っ…」

葉月「はぁ～っ…両腕を…二人の…おっぱいに挟まれて…んふう～っ…天国にいるような…気分になられていただければ…幸いですわ…んはぁ～っ…ふう～っ柔らかおっぱいで…はぁ～っ…リラックスですよ…ふう～っ…ほらぁ…ぎゅう～っ…」

美冬「はぁ～っ…ちょっとエッチな…おっぱいマッサージ…堪能してくださいませ…ふう～っ…それにい…時折…貴方様の耳元を…お舐めしますので…びっくりなさらないように…うふふっ…れろお～っ…んはぁ～っ…はぁ～っ…ふう～っ…」

葉月「ギュッって…挟んだ私達の…おっぱいで…たっぷり…癒やされてくださいませ…んはぁ～っ…れろお～っ…んん～っ…やわらかいおっぱい…ふう～っ…殿方でしたら…大好きですよ…ふう～っ…んふう～っ…はぁ～んっ…貴方様のうれしそうな顔…素敵です…んはぁ～っ…」

美冬「え…?おっぱい大好きなんですか…?んもう…エッチな方ですね…レロレロお～っ…ふう～っ…はぁ～っ…じゃあ…両腕で…私たちの…エッチなおっぱい、いっぱい感じてくださいね…はぁ～っ…れろお～っ…んはぁ～っ…でもこれは…ちゃんとし

た…マッサージですので…いやらしいことを…考えては…いけませんの…んふう～っ
…れろお～っ…」

葉月「ぎゅ～っ…二の腕を…胸ではさみこんで…モミモミって…はぁ～っ…ふう～
～っ…おっぱいマッサージ…気持ちいいですか…？ふう～っ…はぁ～っ…おっぱい
の…やわらかさ…それにい…れろれろお～っ…耳たぶまで…ふう～っ…んはぁ～
～っ…れろお～っ…」

美冬「んはぁ～っ…貴方様の…二の腕の疲れが…取れますように…んふう～っ…
おっぱいで…ふう～っ…はぁ～っ…んふう～っ…頭の中をからっぽにして…力を
抜いてくださいねえ…んふう～っ…れろお～っ…」

葉月「はぁ～っ…頭の中は…私たちの吐息と…ふう～っ…ささやき声と…おっぱいだ
けで…今は十分です…はぁ～っ…ふう～っ…面倒なことは…全部忘れていいですよ
…んはぁ～っ…今は私たちだけ考えてくださいね…んはぁ～っ…れろお～っ…」

美冬「ふう～っ…このまま…はぁ～っ…おっぱいに…うずもれている気持ちで…いて
くださいね…ふう～っ…はぁ～っ…おっぱいが大好きな…えっちな殿方って…ふう
～っ…かわいくて…大好きですよ…んん～っ…ふう～っ…れろお～っ…」

葉月「んふう～っ…それでは…腕を折りたたんで…みてくださいな…んはぁ～っ…
こうやって…腕全体を…はぁ～っ…おっぱいで…で包み込んでしまいますね…ふう～
～っ…私たちの胸…おっきいので…こういうことも…できるんですよ…んはぁ～っ…」

美冬「折りたたまれて…ちょうどいいところに…貴方様の指が…ありますね…ん～～ばあっ…れろお～～っ…れろれろお～～っ…んはあ～～っ…貴方様の指をぺろぺろと…お舐め差し上げますの…んん～～っ…ちゅばあっ…れろっ…はあ～～っ…」

葉月「はあ～～っ…んふう～～っ…貴方様の指…やっぱり…おいしいです…れろお～～んっ…両腕を…おっぱいに挟まれながら…そのうえ…両手の指を…一本一本…丁寧に…口に含んで…いるんですよ…れろれろお～～っ…ふう～～っ…れろお～～っ…んん～～っ…貴方様の…左手の薬指は…れろお～～っ…葉月のものですわ…」

美冬「はあむっ…んはあ～～っ…貴方様の長い指が…口の奥まで…はあ～～っ…はいっていますわ…んはあ～～っ…れろお～～っ…んはあっ～～っ…ちょっと…いやらしい気分になっちゃっていますの…んはあ～～っ…このままでは…はあんっ…おっぱいの押し付けも…強くなっちゃいますわ…れろお～～っ…ふう～～っ…」

葉月「れろお～～っ…れろお～～っ…はあ～～っ…貴方様の…親指も…れろお～～っ…手の甲もお…全部おなめしますの…れろ～～っ…んはあ～～っ…それに…おっぱいのほうは…んん～～っ…こうやって…ツンツンって…乳首があたるようにしております…んはあ～～…ふう～～っ…」

美冬「はあ～～っ…んふう～～っ…私もお…ほら…オッパイの先が…貴方様の…肘に当たってます…んはあ～～っ…れろお～～っ…手のひらも…レロ～～って(←セリフ)してまいりますの…んふ～～っ…でもこれは…施術の…一環ですからね…れろお～～っ…んはあ～～っ…」

葉月「うふふっ…肘に当たっている…私の乳首に…意識が…向いておられるのが…わかりますよ…んふう～～っ…いやらしいお方…んふう～～っ…れろお～～っ…オッパイ全体の柔らかさも…もっと味わってくださいね…んん～～っ…」

美冬「んふ～～っ…そうですわ…力を抜いて…れろお～～っ…おっぱいと…腕が一つになるような…イメージで…んはぁ～～っ…ふう～～っ…はぁ～～っ…んふう～～っ…」

葉月「まぁ…腕の余計なコリも…ほぐれてきましたわ…ふう～～っ…残りの箇所は…肩と…お背中だけに…なりましたわ…んふう～～っ…れろお～～っ…」

美冬「はぁ～～っ…最後に残った…その箇所の施術は…ふう～～っ…上半身を…起こしていただいた…貴方様のお背中に…私が…密着いたしまして…ふう～～っ…」

葉月「んふう～～っ…私は…貴方様の…正面から…抱きつくように…ふう～～っ…ホールドして…んはぁ～～っ…肩から…上半身にかけましてえ…ほぐしていきますの…んはぁ～～っ…」

美冬「んふ～～っ…貴方様に…二人が密着して…肩をお揉みする…施術になります…ふう～～っ…れろお～～っ…背中越しに…押し付けたほうが…私の胸を…さきほどよりも…もっと…感じていただけますよね…はぁっ～～～っ…んふう～～っ…」

葉月「ふう～～っ…背中越しよりも…正面でのほうが…より感じられるのでは…ありませんか…？んはぁ～～っ…ふう～～っ…それに…貴方様と私が…離れないように…足でしっかりと…押さえ込んでしまっていますの…うふふっ…」

美冬「れろお～～っ…密着しているときには…ちゃんと…こうやってお舐めすることも…
忘れませんわ…んふう～～っ…れろお～～っ…もう貴方様と私達は…一心同体ですの
…はぁ～～っ…」

葉月「れろお～～っ…ふう～～っ…抱き合いながら…貴方様の乳首と…ふう～～っ…私
の乳首…れろお～～っ…当たってますわ…んふう～～っ…いやらしいですけど…施術の
…不可抗力ですよねぇ…んはぁ～～っ…れろお～～っ…」

美冬「はぁ～～っ…もちろん…こうやって肩を…おもみするのも…忘れておりませんわ…
ほらぁ…こうやって…んふう～～っ…はぁ～～っ…終わった頃には…肩が軽くなって…
いらっしゃるよう…んふう～～っ…お努めいたしますわ…んふう～～っ…れろお～～っ…」

葉月「はぁ～～っ…ふう～～っ…普段から一生懸命でえ…頑張ってる貴方様のために…
れろお～～っ…ふう～～っ…私達も…最後まで…貴方様に…尽くしますわ…はぁ～～っ
…密着しながら…貴方様のお腹のあたり…柔らかくしていきますね…ふう～～っ…食べ
過ぎや…飲み過ぎ…していませんか…？」

美冬「はぁ～～っ…お疲れの…貴方様の肩…ふう～～っ…楽にして差し上げたいです
わ…ふう～～っ…これは…心からの気持ちですの…ふう～～っ…素敵な貴方様のため
に…私は…誠心誠意…尽くしておりますの…れろお～～っ…」

葉月「んふう～～っ…れろお～～っ…私も…その気持ちは同じですの…はぁ～～っ…貴
方様みたいな方に…ご奉仕できて…幸せですわ…れろお～～っ…はぁ～～っ…貴方様
も…心をすべて私達に…あずけてくださいましたこと…伝わりましたわ…」

美冬「あ～～っ…こうやって…ギリギリまで近づいて…ふう～～っ…肩を…ほぐしていけば…きっと明日には…軽やかになっておりますわ…んふう～～っ…れろお～～っ…はあ～～っ…うなじのあたり…こそばゆいですか…んふう～～っ…少し…我慢してくださいな…ふう～～っ…」

葉月「ふう～～っ…れろれろお～～っ…耳のあたりも…くすぐったいですか…?はあ～～っ…ふう～～っ…私の呼吸音…ふう～～…もっと感じて下さいね…はあ～～っ…」

美冬「んはあ～～っ…貴方様のうなじのあたりに…おっぱいを挟んでしまいますね…はあ～～っ…おっぱいでの…肩もみです…はあ～～っ…おっぱい、重くないですか…?」

葉月「んふ～～っ…れろお～～っ…私は…もっと…ぎゅ～～としてしまいます…んはあ～～っ…ワキのあたりを…体全体で…もみほぐしますの…ふう～～っ…れろお～～っ…」

美冬「はあ～～っ…柔らかいおっぱいで…肩をほぐされる感じ…いかがですか…ちょっとエッチ過ぎますが…気持ちよくなって…いただければ…嬉しいです…んはあ～～っ…れろお～～っ…よいしょ…よいしょ…ふう～～っ…」

葉月「はあ～～っ…貴方様を…こうやって…ホールドしておりますと…んはあ～～っ…お互いの体温を…感じられますよね…はあ～～っ…貴方様の…胸の鼓動もきこえますわ…んはあ～～っ…」

美冬「んふう～～っ…では次に…背中に沿って…胸を上下させていきますね…ふう～～っ…この状態でも…あくまで…リラックスしていて下さいね…ふう～～っ…」

葉月「とても鼓動が…お早くなっておりますわ…んふう～っ…背中のおっぱいが…気になって…しょうがないのでしょうか…行けませんよ…リラックス…リラックスですの…」

美冬「んふう～っ…おっぱいの…上下マッサージ…気に入っていただけたみたいです
ね…ふう～っ…れろお～っ…では…もっと続けてしまいますね…ふう～っ…もっと
もっと…気持ちよくなってくださいまし…んふう～っ…」

葉月「れろお～っ…ふう～っ…それでしたら…私もこうやって…上下に動いてしま
いますよ…ふう～っ…こうやって…胸を押し付けながら…腰を動かして…」

美冬「ふう～っ…いやですわ…お背中から見ていると…ふう～っ…葉月さんとまぐ
わいを…しているみたいですの…れろお～っ…後ろからでは…激しく交わっているよう
にしか…見えませんわ…んふう～っ…れろお～っ…」

葉月「はぁ～っ…まぐわいだなんて…そんな…んふう～っ…正面で…抱き合って…
お互いの…胸と胸…腰と腰が…はぁ～っ…擦れあって…おりますけれど…」

美冬「ふう～っ…れろお～っ…それに…頬と頬も…密着して…耳を舐めていらっしや
るの…はぁ～っ…もう…こちらからだ…愛し合っているようにしか…はぁ～っ…れ
ろお～っ…すこし…うらやましいですわ…はぁ～っ…」

葉月「れろお～っ…ですが…後ろから…密着しているお姿も…ふう～っ…包み込む…
母性ようですわ…ふう～っ…れろお～っ…はぁ～っ…ですから…殿方は…心も
体も…落ち着くことができているとおもいますの…んふう～っ…はぁ～っ…」

美冬「うふふっ…本当に…そう感じていただけるのでしたら…ふう～～っ…うれしいです…んはぁ～～っ…ちゃんと…私達で…癒やされて…おりますでしょうか…？」

葉月「んはぁ～～っ…ほら…こんなに…うなじや…肩から…背中まで…ほぐれてきていますもの…んはぁ～～っ…れろお～～っ…きっと…私達の気持ちが…通じたのでしょうか…はぁ～～っ…ふう～～っ…」

美冬「まぁ…体中の硬くなっていたところ…全部楽になって…いただけたみたいです…ふう～～っ…はぁ～～っ…幸せです…んはぁ～～っ…」

葉月「はぁ～～っ…今までお付き合い…ありがとうございました…ふう～～っ…でもまだ…一箇所だけ…固くなってしまったところが…あるみたいですね…うふふっ…」

美冬「れろお～～っ…どこかが…かた～～くなってしまった…いやらしい殿方のためのお…私達のお…スペシャルサービスパートお…がありますの…ふうう～～っ」

葉月「ふう～～っ…最後に二人で…貴方様のことを…お待ちしておりますわ…是非…こちらも選んでくださいねえ…特別な…いやらし～いサービスですの…はぁ～～～っ…れろお～～んっ…」